

が見られます。

三位一体を三体のキリストであらわす図像の例はロマネスク期にはありませんが、東（中央）の祭室にすでに描かれていた図を利用して、三位一体をどう表現するかを考えた結果、いまのような構成になつたのかもしれません。

南の壁画の主題が教皇の正当性を強調する「鍵の授与」なのは、グレゴリウス改革に奔走する修道院長ジエオフロワの意向によるものでしょう。ジエオフロワはヴァンドームのラ・トリニテ（三位一体）修道院の長でもありました。さらに、南北の壁画をアングロ・サクソン風と見なすタラロンの説を受け入れるなら、次のような事実も三位一体説を補強しているように思われます。ひとつは教皇庁が一三三四年に三位一体の祝日を正式に制定するまえから、とくにアングロ・サクソン写本で三位一体の画像化

## 城と教会のある風景

小澤 実  
歴史家

Minoru Ozawa

ロマネスク期とよばれる一一世紀に建立された、モントワール・シュル・ル・ロワール（幹線河川のLoireではなく支線のLoirであることに注意！）にあるサン・ジル聖堂は、九〇〇年にわたり大切に保存された壁画で知られる教会である。かのロンサールも立ち寄つて祈りを捧げたといわれるこのささやかな教会の来歴は、しかし、ほとんど知られていない。ゾ

が多くおこなわれていたこと。また、アングロ・サクソン画家が活躍した一二世紀のノルマンディーおよびイングランドでは、三位一体にさきげられた聖堂が多いこと。そして、ノルマンディーにおける写本装飾では一一世紀からラビス・ラズリが多くもちられ、入手の経路があつたこと。

研究に私的な思いをはさむことをよしとしなかつた佐保子先生らしく、論文は三位一体説の論証に終始しているのですが、辻邦生さんのエッセイには〈三個の祭室のうち、妻がロマネスク壁画の本質が最もよく感じられて大好きだという中央のアプシスの壁画〉とあります（ロンサールの隠れ家）。

写真を見せてくれながら、「聖堂調査ではいつも主人が撮影してくれた」といつて、ふつとだまつた先生の横顔を思いだします。あのとき通りすぎたのは、サン・ジルの天使だったにちがいありません。

モントワール・シュル・ル・ロワールは、フランス東部の有力領邦、ヴァンドーム伯領に属する、モントワールの領主の拠点である。既に廃墟と化した領主の城は、いまでも、サン・ジル聖堂からさほど離れていない小高い丘の上に、その痕跡をとどめている。今では、モントワールの中心にあるサン・ジル教会が地域の信仰活動になつているけれども、城の近くに建設されたサン・ジル聖堂もまた、かつてこの地域の信仰活動にとつて大切な役割を果たしていたことは想像に難くない。

モントワールの領主の歴史は一一世紀の前半までさかのぼることができる。記録上、最初の領主は、ニアールと呼ばれる。ヴァンドーム伯領のなかの一地方領主であったモントワールの領主は、隣接するラヴァルダンの領主を横目に見ながら、徐々に力をつけた。

一二世紀初頭、カロリング時代にさかのぼる名家ヴァンドーム伯家に後継者問題がおこつた。一二一八年、ヴァンドーム伯アニエスの娘を母にもつ領主

の狭間に埋もれてしまつた教会、それがモントワール・シュル・ル・ロワールのサン・ジル聖堂である。

そなだとすれば、わたしたちは、この聖堂や聖堂に描かれた壁画についての歴史に思いを馳せることは不可能なのだろうか。たしかに聖堂そのものの歴史はつきりしないとは言え、聖堂が置かれた地域の状況は、ある程度あきらかとなつていて。地域の歴史をたどりながら、聖堂が置かれたロマネスク時代の風景を再現してみたい。

モントワール・シュル・ル・ロワールは、フランス東部の有力領邦、ヴァンドーム伯領に属する、

モントワールの領主の拠点である。既に廃墟と化した領主の城は、いまでも、サン・ジル聖堂からさほど離れていない小高い丘の上に、その痕跡をとどめている。今では、モントワールの中心にあるサン・ジル教会が地域の信仰活動になつているけれども、

城の近くに建設されたサン・ジル聖堂もまた、かつてこの地域の信仰活動にとつて大切な役割を果たしていたことは想像に難くない。

ジヤンは、母方の継承権に基づき、ついにヴァンドーム伯位を手中にした。家臣であった一領主の家系が、主君の家督を継いだのである。

モントワールの領主によるヴァンドーム伯家は一四世紀の後半まで継続した。黒死病、百年戦争の開始、農民らの反乱で北フランスが荒れに荒れる時代である。一三七一年、ヴァンドーム伯位は、繼承者を失つたモントワールの領主の家系からブルボン家のジヤン一世の手に移つた。ブルボン家が継いだヴァンドームは、百年戦争で、フランス国王シャルル七世を援助し、戦争の終結に貢献する。高校世界史教科書では、あたかもジヤンヌ・ダルクによる鼓舞によつてイングランド軍を押し戻したかのように説明されるが、実際は、ヴァンドーム伯のような有力諸侯の力添えがあつてはじめて歴史は動くのだ、と言わねばならない。

モントワールがみせる俗なる城と聖なる教会を中心とした生活空間。それは、封建社会とよばれる西洋中世の社会にとつて、とてもありふれた光景である。しかし、わたしたちの西洋理解を形作る心象風景は、じつのところ、かわらずそこにありつけたわけではない。それどころか、この心なじむ風景は、モントワールの位置する、まさにこの北フランスで生み出された。

時代をさかのぼろう。五世紀の西ローマ帝国の崩壊後、ヨーロッパ大陸にいくつものゲルマン人による国家が成立した。その中で頭一つぬきんでたのが

フランスである。現在の低地地方を父祖伝來の

拠点としたフランク王国は、北フランスに軸足を置きながら、九世紀初頭のカール大帝のときには、ヨーロッパを広く支配する存在となつた。このフランク王国の時代、セーヌ川とロワール川をはさむ地域において封建制度は生まれた、といわれる。

封建制度とは、土地を媒介とした主従制度である。主君はその権威でもつて臣下に与えた土地を含む財産の安全を保障し、他方で臣下は、安全を保障してもらう見返りとして、主君に忠誠を誓い、主君に何事があつたときには、軍事力や資金の援助を惜しまない。こうした人と人とのつながりのかたちがもつとも純粹なかたちで実現したのが北フランスである。

その後、フランク王国の拡大にともなつて、この封建的主従関係は、ヨーロッパの各地で受容され、その地域の実情にあつたかたちへと微調整される。しかし、ロマネスク期のとばかりに、封建制度は大きく変化する。フランク王国の崩壊後、王権による強力な統制機能が失われるなか、ヴァイキング、イスラーム勢力、遊牧騎馬民族らがヨーロッパ世界に押し寄せてくる。封建的主従関係といふシステムは持続しているものの、諸侯らもみずから身と財産はみずからで守らなければならない社会へと移行した。これが紀元千年を挟んだ一〇世紀と一世紀のヨーロッパである。このような社会変動のなかで封建制度も時代に対応せざるを得ない。

城と教会を基本構成要素とする封建社会がたちあらわれてくるのはこのときである。王や有力諸侯の統制力が弱いのをよいことに、各地の中小諸侯は、外敵から身を守る一種の要塞として城を、心のより

どころとして教会を建て、その城の周囲の領地に食糧を供給する莊園や商品を交換する市場を設けた。領地内ではその領地特有の慣習法が貫徹され、問題が起つた場合は、領主が裁判をとりおこなつた。やや難しい言い方が許されるならば、領主による一円的支配が成立する。

こうした城と教会を中心とする領主の「国」は、他の「国」と頻繁に領地や権利をめぐる争いを繰り返した。わたしたちがみているモントワール、ラヴアルダン、ヴァンドームは、フランス王国の一部であるにもかかわらず、実質的に別個の「国」である。本来忠誠を誓つた主君に対しても、自身の利益にならないと踏めば、封建的主従関係の契約を取り消すことすら珍しくなかつた。一国一城の主が群雄割拠する戦国時代、それが紀元千年前後のヨーロッパであつた。軍事能力をもつて主君につかえる騎士もこの時代に生まれてくる。

人体を構成する細胞のよう、「国」は増殖し、ひしめき合う。そんな紀元千年前後のヨーロッパを、ある高名な中世史家は、「細胞化 encellement」と名付けた。このように細胞の増殖したヨーロッパにたいして、それ以前とは別の風が吹いてくる。平均気温が上昇し、外敵の侵入が落ちていくとともに、社会全体の色合いも変わる。第一に農業生産の増大である。ロワール川とその支流沿いはもともと肥沃な土地であり、そなうであるがゆえに、穀物畑やブドウ畑が広がつてゐた。そこに重量有輪犁のような技術革新や開墾による耕地の拡大が付け加

わることで、穀物生産が以前の四倍にも達した、といわれる。第二に都市の簇生である。ヴァンドームがそうであるように、セーヌ川とロワール川の間には、このふたつの幹線河川とその支流のちからをかりて都市が活性化した。パリも、ルアンも、オルレアンも、トゥールもそうである。それらの間では商人がゆきかい、都市同士のつながりは強固になった。

行き交うのは商人だけではない。戦士も、聖職者も、修道士も、都市や農村のひとびとも、聖地や奇跡を求めて巡礼に出かけた。十字軍もまたこの巡礼熱に後押しされた出来事である。第三の変化は、こうした宗教心の高揚である。ひとびとの心は、教会へと向かう。

まるで世界全体が、旧きを脱ぎすて、教会という光り輝く衣を身にまとつたかのようである。信徒たちは、ほぼすべての司教座教会、様々な聖人に獻げられた修道院、そして村の小さな礼拝堂をよりよい状態に変えようとしたのである)

一 一世紀初頭に修道士ラウル・グラベルが書き記した『歴史』の、余りにも著名な一節である。紀元千年前後は、たしかに外敵の侵入によつて豊かな教会は被害を受けた。しかしそれにも増して、教会には多くの富が投資されたのである。信仰心のみで教会ができたりはしない。聖職者の生活のために給与

(聖職俸)は不可欠であるし、その聖職俸を捻出するためには土地の寄進は避けて通れない。ロマネスク期に聖堂が数多く生まれたとするならば、それは、聖堂の建設に領主たちが資金を投下したからである。歴史を失ったサン・ジル教会もまた、そうした富の投資を受けた「村の小さな礼拝堂」のひとつである。

一五世紀とそれ以前の時代を比べて、時代の色調がかかる、と述べたのは、ブルゴーニュ公国の絢爛

（紀元千年が過ぎて三年目を迎えるとする頃、ほぼすべての大地、とりわけイタリアとガリアにおいて、教会の刷新がはじまつた。それらはすでに十分な状態でありこれ以上手を加える必要性もないにもかかわらず、キリスト教徒が、これ以上無い程の美しい教会を手にしたいがゆえに、競つてゐるようだ。

たる文化の盛衰をえがきだした『中世の秋』の筆者ヨハン・ホイジンガである。政治の枠組みや技術の革新などといった部分ではなく、政治、経済、社会、文化、そしてひとびとの心性をふくめた全体が大きく変わる節目が、歴史にはときおり訪れる。同様の色調の変化は、封建社会がヨーロッパの中核部にひろがるロマネスク時代にもあてはまる。ラウル・グラベルの「まるで世界全体が、旧きを脱ぎすて、教会という光り輝く衣を身にまとつたかのようである」という表現は、木造教会から石造教会へと移行する、文字通りの時代の色調の変化を端的に言い表している。

のびやかなサン・ジル聖堂の壁画は、ロマネスク期の産物である封建社会の成立と分かち難くむすびついている。一一世紀にさかのぼるモントワール城とサン・ジル聖堂という空間。それは、外敵においえ、うち続く戦争に疲弊し、キリストを待望する終末論が繰り返された紀元千年前後の世界とは時代の色調が変わつたことを示す証言、なのかもしれない。